

る。此の数は前回(東京)の大會報告に於ける論文數百十四には及ばぬとしても第一回(東京)の六十一、第二回(京都)の八十一を凌駕し、殊に四月中旬仙台の如き比較的邊陲の地に於いて開かれたるものとしては寧ろ豫想外に多いと見なければならぬ。

かくて此の論文集も我國心理學界の發展を刻むものであるが併しそれにつけ反省すべき點も少くはない。日本心理學會長松本亦太郎博士は本書の序文に於いて此の點にふれられ、我國の心理學研究所の数は十七に上り北米の約二十、獨の約十二、英の四五、佛伊の各四に對し數に於いては世界の優位を占め、精細にして充實せる研究も次第に多からんとするにかゝらず、なほ我國の心理學界に於いては各研究者間の組織連絡が乏しく研究能力の經濟的統制の不充分なること、發問法検査法等に對し實驗による精細なる研究の比較的少いこと、歐米に於ける新しい學說又は態度の導入を急いでそれらの史的評價と事實的檢討とに努力することの足らぬ憾のあることなどを警めて居られる。かゝる事態は種々の事柄にあらはれるであらうが例へば我國の心理學界に於いては松本博士の最年長者として活動されてゐる外、現在の各研究所主任は多く五十前後の人々であつて、これより年長の人々の數の歐米心理學界に於けるその年輩の人々の數に比し著しく少いことなどは我國心理學界の未だ若く人間の根柢の十分深からざることを示すものであり、又歐米諸國に於いては研究所數と略同數、即ち北米の研究室二十に對し雜誌約二十、英の研究室四五に對し雜誌四五の如く、の雜誌數があるに對し我國に於いては研究所十七に對

し雜誌僅かに約五に止まることなどは各研究室の活動未だ充實せざることを顯すものであると云ふべきであらう。なほ松本博士の言の如く實驗的研究の少いと共にその他面心理學に於ける哲學的或ひは人間學的省察の殆ど缺けてゐることが、一方病態心理學などに關係してゐる我々の立場から殊に痛感されるのである。

是の如くして我國心理學界は着々進歩しつつあるとは云へなほ多くの弊と缺陷とを藏してゐる。これらの除去は心理學界内部に於けるものの精進と反省とを必要とすること勿論であるが又哲學者などの側からも一層の鞭撻と批判とが望ましいこと論を俟たない。近頃我國の哲學者の間にも心理學の問題に關心を持ちその批評等をも試みられる人も(例へば高山岩男氏の如き)現れて來たがなほ多くの人々からの關心と批判とが向けられることを希望してやまない。さう云ふ意味でも私は此の「心理學論文集」が多くの哲學界の人々に讀まれることを願ふものである。(岩波書店發行、定價貳圓八拾錢)(佐藤幸治)

麻生義輝編 西岡哲學著作集

西岡氏が我が國に於ける西洋哲學研究の先驅者であつたこと、とくに「哲學」なる譯語の創始者であつたことばわれ／＼も風に聞いてゐた。しかし今日まで彼れの著作に直接してその思想なり、その西洋哲學についての知識の程度なりを窺ふ折がなかつたのは確かに不幸なことであつた。尤も西洋思想としては既に基督教が知られてなり、平田篤胤以後國學者は基督教を内面的に攝り入れ

て自らの神學の發展に資したといはれ、隨つて西洋哲學についても斷片的知識が存したやうである。こゝに西洋思想を最も早く攝り入れたものが佛家にあらず儒家にあらずして却つて最も國粹的なるべき神道家であつたといふ奇異な現象が示されてゐる。これは恐らく佛教・儒教に對峙するために體系化を急ぐ神道が一方に於てその依りどころを當面の敵たる儒佛二道に求むることを敢てしたにもせよ、他方に於てあくまでこれらを超えなければならなかつたことを語つてゐるのではなからうか。しかしかゝる事實があつたにせよ、西洋哲學が哲學そのものとして、體系的に輸入せられたのは何としても維新の際のことであらう。西周氏はその輸入者の唯一人ではないとしても最も早き、最も偉大なる一人であつたやうである。それにも拘らず彼れの名が加藤弘之・外山正一等の諸氏のそれに較べて知られることの少いやうに見えるのは残念なことである。

今日の我が國の哲學は一方には迫りくる現實の勢ひに直面してその問題の解決について大きい苦惱を味つてゐるとはいへ、しかもなほ西洋の哲學の單なる模倣・學習の域を脱してその思索に於て自ら獨自のものあることを示してゐる。しかのみならず現實に直面してのこの苦惱は却つて我が國の哲學が西洋の學說の學習を終つて世界に共通にして、また痛切に己れ自らの問題であるところのものを取り上げてゐる歡ばしい證據である。西周氏はかくのごとく發展してゐる我が國の哲學界にたゞ時間的に端緒を占むるものとしてのみ記憶せらるべき人ではなくして、彼れは今もわれわ

れの思索の中に生きてゐるのである。もとより彼れの思想がある特定の學統によつて承け繼がれてきてゐるといふがごとき事實はないけれども、われ／＼の思索を表現する手段たるのみならず思索の方向を定める起縁たる哲學の術語の多くが彼れの創案になつてゐるのである。斯學草創の時にあつたこれがために術語を選ぶといふことには言語に絶する辛苦を伴つたことであらう。『哲學』以下、哲學的諸學科の名稱をはじめ、主觀、客觀、理性、悟性、現象、實在、演繹、歸納等、彼の翻譯又は選定した夥しき術語が、今日も尙、生ける言葉として使用されてゐる。この點から、我が國に於て現在哲學を攻むる者は、彼の名を知ると知らざるとの別なく、彼の惠澤を被つてゐると言ふべきであらう』（編者序文）或はこれらの術語の適否については問題もあらう。また思索の手懸りとして言語が重んぜられ、いろ／＼の言葉がその歴史性若くは日常性に於て捉へられ、吟味せられる一つの結果として、固有日本語ともいはるべき言葉が哲學の論文の中で好んで用ゐられるやうに思はれる今日の情態より觀れば、西周氏が一部分漢學の素養のために哲學の術語を漢語より獲たことには爾來永く哲學の術語を漢語に隸屬せしむる素地を作つたものとして責むる餘地があるかもしれない。しかしながらこれによつて彼れの功績を無みすることはできない。哲學の術語を日本語化することはいかにも尊いことであらうが、しかしたやすいものとは思はれない。

右のごとく考へるならばこの度「西周哲學著作集」が西男爵家の寄託を受けた文學士麻生義輝氏の努力によつて刊行せられるに至

つたことは極めて有意義なことであるといはなければならぬ。西周氏は初幕府に仕へ和蘭ライテン大學に留學し、維新後は陸軍・宮内・文部の各省に關係し、元老院議員・貴族院議員に任ぜられ、東京學士會院會長に重任し、東京師範學校長の事務を見るなど各方面に互る公の活動をなした外、私塾を開いて育英にも従つた。また明治七年森有禮氏が主として創立した明六社に加はつて「明六雜誌」に意見を發表し、或は同十七年創立の「哲學會」の組織を佐くるなど文化運動にも關係した。随つてその論策は哲學以外の各方面に及んでゐる。本著作集は彼れの全集ではないが、知識・道徳・心理・藝術・宗教・政治・社會思想など大體に於て廣義の哲學的領域中の諸問題を取扱つた論文を網羅し、それに「西周年譜」及び編者の詳しい解説が添へられてゐる。その内容は次のごとくである。

開題門(漢文明治三年稿) 靈魂一元論(漢文三年頃稿) 尙白劄記(壬申三月稿) 美妙學說(五年頃稿) 生性發說(六年一月稿) 生性劄記(漢文五年起稿) 人智論(五六年頃稿) 情智關係論(同前) 社會黨論ノ說(同前) 百一新論(七年版) 教門論(七年稿) 致知啓蒙(自序) 漢文本論和文七年刊行) 知說(七年起稿) 人世三寶說(八年稿) 譯利學說(漢文十年八月稿) 學問ハ淵源ヲ深クスルニ在ルノ論(十年八月稿) 政略論(五六年頃稿) 幸福ハ性靈上下形骸上下相合スル上ニ成ルノ論(前同起稿) 東京師範學校ニ道德學ノ一科ヲ置ク大意ヲ論ズ(十四年十一月稿) 論理新說(十七年五月起稿) 心理說ノ一斑(十九年六月講演) 理ノ字ノ說(二十二年十月起稿)

なほ本著作集には翻譯が收められてゐないが、これには「利學」(シエ・エス・ミル、十年上下二冊刊行)及び「心理學」(シヨセフ・ヘン、十一年上卷十二年下卷刊行)。(ヘンの心理學は七年開成學校に於てサイル氏が教科書に使用したといふ)がある。

西周氏の哲學上の立脚地について一言すれば彼れは主としてコムト、ミルに據つて實證主義の立場を採るものであるが、自らは「實學」と稱へてゐた。またカントの影響も受け、就中「永久平和論」を好んで、一脈の理想主義的傾向を留めてゐた。随つて當時の多くの啓蒙思想家とは異つて實證主義より唯物主義に進まうとはせず、よしんば實質に於て唯物主義・無神論に極めて近い考へを採つた場合にも自らそれと意識しなかつたといふことである。最後に本著作集より二三引用してこの粗體なる紹介を終ることとする、御前講演の覺書と認められる「社會黨論ノ說」はコミユニ

スト・ソシアリスト・ニヒリストを論じて「唯之ヲ未然ニ防ガツ術ノ第一トシ、而テ既然ニ至リ禁止ノ令ヲ下スハ、策ノ極メテ拙キ者ニシテ、唯其抵抗力ヲ強クスルノミ」と結んでゐる。「學問ハ淵源ヲ深クスルニ在ルノ論」は日本人が支那の蹈襲模倣を事として「竟ニ俗該ニモ日本人ハ模倣ニ長ズ、發明思索ハ長ズル所ニ非ズト謂ハシムルニ至ル」ことを嘆き、「然ルニ今模倣ノ弊ヲ矯メムト欲セバ、何如ナル道ニ從事スベキヤト云フニ、余が見ル所ニテハ、唯二道アルニ過ギズ。其一ハ實驗ヲ主トス。其一ハ學問ノ淵源ヲ深ウスルナリ」と説き、一方には自己の體驗或は自國の特殊の事情に即することによつて空疎生硬事實に切ならざる弊を去るといふ

に「固ヨリ時勢ノ要スル所ナレバ、急ニ應シ、捷徑ヲ取ル等ノ事モ、今日免ル可ラザル事ナリトハ雖ドモ、總テ學問ニ從事スル以上ハ、ナルタケ直接ニ當世ノ事ニ拘ハラズトモ、各其科學ノ深遠ナル理ヲ極メ、無用ノ事ニ類スルモ、理ヲ講明スル爲ニハ徹底ノ見解ヲ要シ、特別ノ衆理ヲ聚メテ一貫ノ元理ニ歸スル如ク、所謂江海ノ浸、膏澤ノ潤ノ如ク、左右其源ニ達フノ地ニ至ルベキナリ」蓋シ講學ノ上ニ在テ、前ナル實驗ト後ナル淵源ヲ深ウスルトハ、遊カニ見レバ兩ツノ者相反スルガ如クナレドモ、實ハ兩相待テ、他國ノ學術ト云フ者、始メテ自身自國ノ用ニ供スベキナリ」故ニ一ハ實驗ヲ主トシテ生疎ヲ免レ、一ハ淵源ヲ深ウシテ精微ニ至ラバ、則チ後生ニ至テ新理ノ發明者興ラザルヲ患ヘムヤ。是余ガ後生諸賢ニ望ム所ナリ」といつてゐる。まことに今日の我が國の哲學はこの先覺者の遺託に副ふところがなないではない。しかし今後の一層の發展が先輩の教へに従つてなされなければならぬ。 (岩波書店刊行、限定四百部、定價四圓)

(小野隆祥)

彙報

京都哲學會公開講演會

豫告の如く、昭和八年度の公開講演會は去る十二月二日土曜午後一時半から法學部第四教室に於て開かれた。當日は稀な快晴と溫暖とに恵まれ、宏壯な法經新館の大教室も眞摯な聽衆で充ち溢れ成功裡に午後五時閉會した。講演の題目と講師とは次の通りである。

感情研究の新展望

東京帝國大學助教 高木 貞二氏
アナログア思想の位置

京都帝國大學教授 山内 得立氏
尚ほ右の講演は共に、近く本誌上に請うて掲げる筈である。

講演會終了後、六時から教官食堂に於て、兩講師を主賓として晚餐會を開いた。來會者は講師の外に三十一氏、臺北の伊藤教授をはじめ遠地の諸